

乳幼児期子育てにおける「こどもの憤怒・反抗」に対峙する 養育者への支援

研究代表者 聖学院大学心理福祉学部 教授 大橋 良枝

Ohashi Yoshie

共同研究者 KIPP 渋谷心理オフィス 揖斐 衣海

Ibi Emi

研究の要旨

本研究は、こどもの憤怒・反抗への対応に困難を感じている乳幼児期子育て中の母親の問題を、未熟な青年期心性を維持しているために怒り感情の取り扱いができないものと仮説し、乳幼児期子育ての中で困難を感じながらも不必要に孤立している母親たちを支援につなぎ、同時に精神的成熟に導くプロセスを「怒り」の視点から描くことを目的として実験的集団精神療法事態を設定し、事例研究を行った。研究1を通して、仮説で母親の個人的な精神発達の問題に子育ての難しさの問題を帰属させて過ぎていたことを省み、母親となって大きな人生の転換を迎えた女性が改めてアイデンティティを束ねていくプロセスを阻害する要因の検討を行った。研究2を通して、とりわけ日本における強固な理想的母親像が、個々人その人らしい母親としてアイデンティティを紡いでいくことを阻害している可能性を示した。研究1.2を通して、母親がアイデンティティ形成を途絶させる多層的なファクターの仮説(図1)を提示した。

1. 研究の目的

虐待問題が後を絶たない現代、子育てを巡る支援は火急の課題である。乳幼児期の子育てにおいて母親が最も困難を感じる状況の一つに、こどもの憤怒や反抗への対処が挙げられる。こういったこどもの姿に対峙した母親が怒りを喚起させられるのは普通のことなのだが、自らの怒りに対処する力の弱い母親の場合、怒りに任せる、あるいは怒りを否認するがゆえに不適切な養育行動をとってしまうことがある。不適切な行動をした母親は真面目であればあるほど自分を責め、他人に相談することも難しくなる。つまり、「健やか親子21」(厚生労働省, 2001)にも虐待の一要因として挙げられた孤立状態に陥ってしまうのだ。

筆者らは先行研究において、自他に対する怒りへの対処が難しい非臨床群の青年期女性たちの多くも、アイデンティティ発達の未熟性を示していること、そして彼女たちが内に隠していた怒りを表現できるようになると主体性や自尊心を取り戻すことを見出した¹⁾。怒りの表現によって主体性や自尊心を取り戻すことができるのは、怒りの奥に隠されていた抑圧せざるを得なかった欲求に触れることを通じて、アイデンティティ形成プロセスを辿り直せるからだと考えられる。

青年期発達が停滞していると言われる今日²⁾、母親たちが目の前の子育てに伴う現実に直面することを契機に自らの未熟性に悩み始めるのはよく見受けられる。これもまた非臨床群である「普通の母たち」のアイデンティティ発達の問題に起因するのであれば、母親の怒りの問題にアプローチし、母親たちの青年期心性を成人の心性へ

導くプロセスについて検討することは意味があるだろう。よって本研究では、未熟な青年期心性を維持し、乳幼児子育て、とりわけこどもの憤怒・反抗への対応に困難を感じている母親が、内に隠している怒り感情を表現するのを援助することで、孤立した子育てからの脱却及び自尊心を感じられる子育ての支援につながるだろうと仮説し、乳幼児期子育ての中で困難を感じながらも不必要に孤立している母親たちを支援につなぎ、同時に精神的成熟に導くプロセスを、「怒り」の視点から描くことを目的とする。

2. 研究1.

2.1 研究1の目的

実験的事例研究本調査に向けて、仮説・方法の妥当性を検討するためにパイロット研究を行う。

2.2 研究1の方法

実験的事例研究法。研究1の手続きは以下の通りであった。

2.2.1. 研究協力者募集 (X年^{注1)}7月上旬開始)

募集チラシを施設の長の同意の得られた近隣の放課後等デイサービス、幼稚園、小学校に配布した。また、筆者のホームページにもアップし、呼びかけた。広報文には、子育てでこどもに怒りを感じることは当然であることに触れた上で、「心理士が個々の安全を保障する場で、人の話に耳を傾け、思い切って本音を語り、自己発見や孤立感からの脱却を目指す」グループであると記した。申し込みは9名であった。

2.2.2. 事前面接 (X年8月中旬開始) 申込のあった9名に対し、インフォームドコンセントの手続きをとり、半構造化面接と質問紙調査(日本語

版 UCLA 孤独感尺度 (第 3 版)・多次元完全主義認知尺度・親の省察機能質問票日本語版)を行った。事前に作成した半構造化面接のインタビューガイドは、①本研究に参加を決めた動機、②自分と子どもとの関係、それを取り巻く家族との関係、③プログラムへの期待を問うもので、それぞれの回答に対し、実際の出来事的具体例とそれにまつわる感情を聞いていった。インタビューは IC レコーダーで録音した。

2.2.3. 集団精神療法事態を用いたプログラムの実施 (8 月下旬平日連続 2 日間) 1 日 90 分のセッションを 3 回行った。9 名の研究協力者中、1 名が事前辞退。子どもの特徴や研究協力者自身の悩みの特徴から、5 名と 3 名のグループに分けた。それぞれのグループに、臨床歴 20 年以上の男女一名ずつの心理士で、集団精神療法も専門とする者がコンダクターとして入った。コンダクターの介入は、①怒り等欲求不満を積極的に聞く。②怒り等欲求不満を安全に表現しやすい参加者から表現させる。③自分の子どもに対する洞察ではなく、自分の感情に対する洞察を促す。④子どもの話に流れる可能性はあるが、その裏にある参加者自身の欲求不満に焦点化する。(しかし、安心感を損なうやり方は避ける) の 4 点を方針とした。また、安全に内省を深めていくために、メンタライジング・アプローチの Not Knowing スタンス³⁾を取りながら、参加者が自己の感情や思考に触れ、プロセスするのを目指すことを介入方針とした。

2.2.4. 事後面接 (X 年 9 月中旬) 研究協力者が事後の生活について自由に話す時間を設けた後、事前面接と同様のインタビュー調査と質問紙調査を行った。これも IC レコーダーで録音した。

また研究 1 は、聖学院大学研究倫理審査の承認を受けて行われた (審査番号 2019-4b)。

2.3. 事例と事例理解

2.3.1 事例概要 5 名の実験的集団精神療法事態 (以下、グループ) は、諸事情より公表を控えることとなったため、ここでは 3 名のグループを検討した結果を報告する。

このグループは、発達障害の診断を受けた子どもを抱える母親 3 名 [A,B,C] と男性コンダクター (50 代)、女性コンダクター (40 代) のグループである。

3 人の子どもを抱えながら会社員でもある A は、イライラしてしまう自分を変えることで子ども達の変化につなげていきたいと語っていた。また日常では、夫に自分の性格が悪いと指摘されることが多く、A は「悲しい、疲れちゃう」と話していた。元保育士の B は、長男の不登校、次男の育てにくさについて、自分で勉強して色々な人に相談しても自分の関わり方が適切だったか自信

が持てないままであることを語った。B はその必死さが周囲に理解されていると感じられていないことが明らかだった。医療領域で働く C は 12 年間の二人の発達の特性を持った男児の子育てについてじっくり話す機会もなかったことから参加を決めたと語った。

2.3.2 事例プロセスと理解 [母親たちの心的状態の重なり合い：グループとしてのテーマ]

#1 では、A も B も医者、カウンセラー、教師たちに理解されないことや関わりが不十分であるエピソードを語り、支援者への不信感、家族からの関心や尊重が足りないことを語った。C は、それまで比較的穏やかに聞いていたが、家事や子育てに忙殺されている A の話に堪り兼ねたように、A も夫も共稼ぎであり、それぞれが置かれている状況に差があるわけではないこと、そして実際には、仕事をしている方が子育てよりも楽なこともある、と話し始めた。そこで以下のやり取りが生じた。

男性コンダクター (以下、M-Co) : 「楽っていうのは？」
C : 「自分にストレスがかからないことですね。日本語も通じるじゃないですか。自分が心から、はらわたから煮え返るっていうことはないじゃないですか。働いていて、ありますか？」

M-Co : 「ありますよ」

C : 「一日に何回ぐらい？」

C は家庭のイライラを知っているからこそ、仕事は自分の頑張りであまりうまく回すこともできることが余計にわかる、仕事の方がスムーズであることを説明した。A は仕事には報酬がある、B は子育てには頑張っただけの評価も出ず終わりも見えない、と口々に子育ての大変さを語った。そこで、M-Co は Not knowing スタンスを取って、C の心的状態をさらに描こうと試みた。

M-Co : 「どんな風にはらわたが煮えくりかえるのか、ここでしゃべってないから僕分らない、聞きたいです」

C : 「エレベーターにね、各階止まって開けて閉じてってずっと繰り返すんですよ。まったく意味が分からなくて。でもね、1 年生ぐらいにようやく、それぞれの階で匂いが違うんだってことが分かったんですよ。そんな息子にはらわたは煮えくり返ってもしょうがないじゃないですか。言葉が通じないから、止めても聞かないし、怒鳴ってもダメなら、もう叩くしかないじゃないですか。はらわた煮えくりかえるのを乗り越えて分からなくなりました」

M-Co : 「すごく・すごく手がかかったんだね」

C : 「朝から大声でマンションも端から端まで走ってました。本当に耐えられなくて、もう前泊して、車で寝たらどうかとか、車のトランクに入れてしまいたいとか、色々考えましたよ、でもそれはダメだってもちろん分かってるは分かっているんですけど・分かりますか？それでマイホームを買おうって思ったんです。でも、この時期のことはあまり思い出せなくて・でも今はもう成長して、

指示も少しづつ入るし仏みたいな悪意がない子なんです」
M-Co:「もちろん上の子はいっぺんには分からないだろうけど、さっきぶつって言ってなかった？」

C:「ぶちましたよ。止まんないです」

M-Co:「それほど気持ちが揺れに揺れて、その繰り返しの錯乱した状態が目には浮かぶようで、僕も苦しいなと思いました。そのすさまじい泣き叫びに耐え続けて我慢をして、周りも気にしてっていう状況が相当苦しいだろうことは伝わってきました」

M-Coはその当時の情動、その状況、その結果の苦しさを含めた共感的承認を行った。その後、AもBもこどもの声の大きさに対する困難を語り、相談しても助けが得られなかったことにも触れた。その中で、Aは息子から「俺から逃げんな」と言われたことも語った。

#1の終わりには、M-Coが「このグループには《叫び》がある」と伝え、その叫びには自分だけではなく、こどもの叫びも混じりながら誰も分かってくれない、「そういう騒音がずっと伝わってくる感じがある」と言語化した。そして、叫びは騒音でもあって、本当に求めていることを伝え、受け取り損ねることもあるから、ここで理解していけたらいいことを共感的に伝えた。女性コンダクター(以下、F-Co)も、夫や支援者に労いや助けを求めて話すと「叫び」や「騒音」として聞こえてしまい、時には夫にさえも「嫌だったらやめれば？」と嫌味さえ言われてしまう。こどもを受け止めたいと思っているにもかかわらず、本心が伝わらないことこそが辛いことではないか、とこれまでの文脈を踏まえて彼女達に共通した心的状態を共感的に承認した。

【言動の背後にある意図を考える】 #1でグループとしてのテーマが共有されると、メンバーたちの落ち着きやメンバー間のかかわりあいが増えていった。#2では、Aは家の庭木を勝手に切った際のエピソードを語り、夫が思いのほか怒ったことが理解できないと話した。そこで何が起きたかを皆で考えていった。Aは、この過程を通して、夫が庭木に思い入れがあったことに初めて気がついた。その後もAは夫が週末に何でも家族で行動したがることについて、休む間もないので「面倒臭い」と話すと、BがAの夫は幼少期は同じような体験をしてきたのかと聞いた。そこで初めてAは、夫の両親は喧嘩が絶えなかったことを語り始めた。

A:「兄弟でいつも押し入れから見ていたっていうのを語られたことがあって。家族仲良く、こどもに気を遣わせないようにしようっていうのを最初から言われていたんです。『俺たち気を遣ってたからね』って」

M-Co:「本当にびくびくして育ってきたんですね・・・」

F-Co:「だからAが怒るのが嫌なのでしょうか？」

A:「多分そう。私が行き場がなくなってものにあたっていると、キレられるので。みっともないって」

M-Co:「(Aが怒っていると)怖くなってしまおうのですね。昔のお母さんが荒れているのを見ているようで嫌になってしまうのかもしれないですね」

A:「多分それをうまく言えないんだと思うんですね」

このセッションでは、普段Aを批判する夫が、実は怖さを感じていること、その点で脆弱さがあることなど、Aは再認識していった。さらに、Aの怒った姿に何を夫が見ているのか、何を体験しているのかを皆でメンタライズするプロセスが生じた。夫の言動の意図に注目していく展開が起きてきたのだ。

【偽りのなさ】 初日の最後の#3では、AとBが女性リーダーに関心を向け、こどもがいるかどうかを聞いた。Aがイライラする気持ちをどうするのかを聞いてみたかった、と話した。F-Coは自分もこどもに対して感情的になってイライラすることはあることを認め、そのような時には自分の気持ちを我慢したり、完璧さを求められているかのようなプレッシャーを感じていることが多いことを伝えた。その後、Aは息子自身がストレスをたくさん抱えて帰ってくることや、Bは息子も自分も内に秘めて体調不良になってしまうことを語った。M-Coが「誰かねぎらいの言葉を旦那から欲しがっていたけれど、それは息子さんも同じだね」と伝えると、Aは納得する。ここで、A、Bはそれぞれに、息子たちが頑張れど、学校では怠け者扱いされてしまう辛さ、自尊心が下がってしまうことなどを吐露する。その中で、二人はともに、母として頑張ってくださいと言われても、何をどうしたらいいのかわからないことも多い、と無力感を話した。最後に、Bは息子の同級生の母親たちには警戒し、ママ友は理解してもらえないから作らない、家のこともこどものことも話せないし、話すと噂になって広まる、と安全感的なさを語り、Aも人間不信気味であることを認める。

Cは兄の特別支援学校の母親たちとは話せても、幼稚園では話さないことに気づく。このように3人はそれぞれが日常的に体験している孤立感を率直に語り始めていった。

【個人のテーマの浮上】 翌日のセッションでは、AとBは、それぞれ夫が自分たちの状況を理解しない怒りを引き続き語った。M-CoはBが夫に対してなぜそこまで怒るのか、Not knowingスタンスで聞いていくと、Bが外で必死に働こうとしてきたこと、それが元気になることでもあったことが分かってきた。M-Coは「だからそんなに働こうと一生懸命にしておられたんだな」と伝え、Bが変わりたいと思っているのは伝わっている、と共感的に承認した。その後Bは、安心して語れる場への求めや安心感がなくなって人間不信になった経緯、夫との関係性を語った。その中で、ふとこう言った。

B:「私、旦那から料理を教わったんですよ。母が22の時

に亡くなって、その前から闘病していたので私は父からも家事を学んだんです」

Bは、母の死についてこの4セッション目から少しずつ触れ始めた。その翌セッションではM-CoがBの母が早逝し、料理を夫や父親から習ったという体験がどんなものだったかNot knowin スタンスで聴いていくと、Bは女性にとって結婚や子育てをする中で母親の存在がいかに大事かを語り始めた。

B:「母親ってすごい大事な存在で、それがこどもを産む、結婚する前にもういなくなっちゃったっていうのが、私にとって本当に最大の悲しみで、そのことに対して軽い言い方をされるとやっぱりつらくて・・・本当に私の気持ちをはわかってくれる他人っていうのがいない」(と語って、母が亡くなった短大のころ、家族も大変だったこと、それへのフォローが誰からもなかったことを話した。)

M-Co:「Bにはデリケートな重い体験があって、そこに入ってこられると許せない感じがあるの shouldn't we」

B:「お前が何とかしろって言われているようだったのが、本当に辛くて」。

F-Coは、Bには深い悲しみがあることが分かる一方で、何を言っても大丈夫そうな雰囲気も同時に感じていることも伝えると、Bはこう話した。

B:「あまりそういう機会がない限り極力明るく余裕を見せたい。なんて言うか、相手が気を遣うのが分かっちゃうから・・・泣くと母親が悲しむから泣くなって親戚に言われてきたんです・・・だから引きずっているんですよ。最近ようやく泣けるようになったんです。10年近く泣けなくて。自分で感情に蓋をすることに慣れちゃったんでしょね。なんでもほったらかされる」

B自身の怒りの背後に、援助者や夫に対する不信任感、頼れなさがあり、それについて詳細に聞いていった結果、一番理解してほしい夫や姑との間に温度差が生まれてしまうのは、母の喪失に関わることであったことが浮かび上がってきた。

その後、青年期時代の話をもAもBも語る中で、次のようなやり取りが生じた。

M-Co:「Bにわがままに生きてきた時代があるの？」

Bは「あんまりないですね。家ではがんばっていい子をしていて、あんまりわがまま言えなかった。妹がいてお姉さんでいなきゃっていうのがあって、妹がうらやましいなって思う。自由奔放なんです」

M-Co:「自由でうらやましいんですね」

F-Co:「『ケアされていない』には守られていない、というのもあると思ったんですね」

B:「でも・・・部活はすごい大好きで、不登校にならなかったのは部活のおかげだと思ってます・・・(Aが頑張ってるものがないと言っていたのに対して)私もずっと頑張ってきてない自分がいるってずっと思ってた。成し遂げてないというか。私は幼児教育科出てるけど幼稚

園教諭しか持ってなかったんですね。それが中途半端な気がして・・・保育士の資格を3年前に自力で勉強して取得したんですよ・・・それでやっと頑張ったと思ったんですよ」「本当にすっげえ私の人生、中途半端と思ったんですよ。」

Bは保育士資格を必死で取り、母の喪失で中断してしまった青年期からの課題に向き合った。だからこそ、仕事とは夫に最も認めてもらいたい頑張りであることが皆に伝わった。このグループの最後にBはこう語った。

B:「すごくいい機会でした。安全な状態でしゃべれるっていうのは、すごい本当に。パターンって言うのは本当にああそうだなっていう。結構腑に落ちるところでした。そのパターンに陥らないようにスモールステップで心がけていきたいなと思います。」

2.4.考察

本研究では怒りに着目し、その背景にある彼らの抑圧された欲求に触れることが孤立からの脱却と、母親のアイデンティティの取り戻しにつながると考えて実験的事例研究を行った。特にBのプロセスを見ると、母の死によって断絶していた自分の人生に気づき、その取戻しが始まるかのように見え、仮説の通りのプロセスが起きていたようだった。

一方、事例中のM-Coは彼らの怒りや不満の言葉に「叫び」の言葉を当てた。そしてこの「叫び」こそが、母親を中心とする養育者支援の難しさの中核にある力動であると考えた。

「叫び」は、①自分だけでなく様々な声が混ざり合った圧縮した訴えであり、②本当には理解してもらったり、労いや助けが得られたりすることを求めているのに、③周囲には騒音のように忌み嫌われる、といった、コミュニケーションの失敗と説明できる⁴⁾⁵⁾⁶⁾。本心では助けを求めているはずなのに、周囲には、怒りやパニックなどに映り、周囲の者を怖がらせたり、遠のかせたりしてしまい、結果的に叫んでいる者が、自分の本心が伝わらない痛みを抱え、ますます孤独になってしまうという、ネガティブなサイクルを内包したやり取りの失敗なのである。

こうして見ると、母親たちの「叫び」は圧縮され、様々な要素を含みこんだ混乱したメッセージのようである。虐待行動のリスク要因も多層的であることがわかっているが、その多層性が無視され、叫んでいる者だけが責任を負わされることは多く起きているようだ。

多層性について事例の中に見られたものを見ていくと、例えば、母の死といった母親自身の抱えている生育歴の問題があった。こうした個人の歴史の中にある葛藤の問題は、仮説で想定していたものであった。これに加え、Cとこどものエピソードに見られるような、泣き叫んで止まらないこどもとそれを止めようとする母親の息苦しくなるような関係

性があった。育てにくい子どもを授かったがゆえに起きている関係性の問題と言えるだろうか。また、Aの語りに見られたような、夫の生育歴に起因するコミュニケーションの問題もあった。つまり家族成員それぞれの抱えている問題や葛藤から、それぞれの間の相互作用に困難が生じ、結果母親がその責任を負わされるというパターンが見出されている。

大日向⁷⁾は、日本社会の中で養育上の問題が起きた場合、母親たちが加害者として糾弾されやすいという社会的な構図を指摘している。まさに、このような責任が母親に負わされる図式は、この構図によって説明されるだろう。そして、この糾弾の背景にある「養育の責任は母親にある」という社会文化的価値観が、社会の中だけでなく母親自身の心にも内在化し、誰かに責められずとも子どもの問題が起きた時に自分を責めてしまうことも起きているようだった。つまり、それなりに良い養育をしている彼女たちも、その良い部分を見失って自分たちを不出来な母親と自分で責めていたのである。

一方、「叫び」を通して、その奥にある気持ち、考えや意図に少しずつ触れていったプロセスから、Aは子育てがとても丁寧で、自然な女性であることが分かってきた。ここでは全て紹介できないが、魚や昆虫好きな息子に寄り添う姿はAの素晴らしい個性と感じられた。こうしたその人個々人の持つ、自分らしく母親をすること、つまり、自分なりの母親アイデンティティを紡いでいくことが、良い母親とはこうあるべき、という社会的価値観によって妨げられることがあるのだろう。

本研究を始める際、怒りの取り扱いが難しく孤立してしまう心理学的背景を母親個人の問題と捉えていたことをここで反省とともに修正したい。これらの事例理解から、確かに母親のアイデンティティ発達は途絶しているが、それは青年期以前の発達の歪みに起因するだけでなく、母親になるという人生の大きな転換のプロセスを迎え、多層的な理由によって家庭や社会の文脈において自分らしく母親になっていくプロセスが阻害されている場合もあるのではないかと考えるに至ったためである。

3. 研究2.

研究1では、研究協力者が児童期から思春期のこどもの母親も多く含まれた。そこで本実験の事例研究では、乳幼児(0-3歳)の子育て中で、そのこどもの憤怒や反抗的主張に耐えられなさを感じている母親たちを対象とする実験的事例研究を行った。

また、パイロット研究から、対面の場合、こどもの預け先がない、こどもに問題が起きると母親に電話がかかってくる、グループ中でも電話に出なければならないなどの、プログラム実施における具体的な問題が見えた。こうした問題は、母親がいかに個

人的時間を捻出することが難しいのかを表しているが、本実験はコロナ禍での実施ということもあったので、ZOOMを用いたオンライン・グループとし、開催日程も全員の都合を加味しながら一回ずつ決めていく方式にした。

3.1.方法

本調査は以下の手続きを踏んで行われた。

3.1.1. 研究協力者募集 (X^{注1)}+2年6月上旬開始) 募集チラシを、近隣の保健所、助産施設等に依頼・配布した。また、筆者のホームページにもアップし、呼びかけた。広報文は研究1と同様であった。

3.1.2. 事前面接 (X+2年8月中旬開始) 申込のあった3名に対し、インフォームドコンセントの手続きをとり、パイロット研究と同様の内容で半構造化面接と質問紙調査を行った。ただし、今回はコロナ禍であったことと、プログラム実施もオンラインで行う計画であったことから、事前事後面接もZOOMを用いて実施し、ZOOMの録画機能を用いて記録した。質問紙調査はGoogle Formsを用いて行った。

3.1.3. 集団精神療法事態を用いたプログラムの実施 (X+2年8月下旬~X+3年2月) 1日90分のセッションを10回行った。構造はMentalization Based Therapy-Introductoryという、体験の内省を促す(メンタライジング機能を賦活する)心理教育と集団精神療法を組み合わせたプログラムを用いた。また、心理教育部分では、子育てにおける愛着の問題と自らの愛着の問題、及び精神健康の問題にかかわる講義を行った。プログラム実施者(以下コンダクターCodt.)は、先述の通りMBTのトレーニングを受けている者が務めた。また、コンダクターの介入方針は研究1同様であった。

3.1.4. 事後面接 (X+3年3月中旬) 研究協力者が事後の生活について自由に話す時間を設けた後、事前面接と同様のインタビュー調査と質問紙調査を行った。インタビューはZOOMの録画機能により記録した。

これらは、聖学院大学研究倫理審査の承認を受けて行われた(審査番号2021-3)。

3.2.事例

3.2.1.事例概要 X(31歳)主婦(出産に伴い専門職を辞す)。夫(32歳 海外赴任)。4歳女兒, 1歳女兒。地域の保健所に家庭内のストレスの件で相談に行き、大学附属相談室を紹介される。相談室来談時主訴は、「夫にイライラが止まらない。イライラから家のドアを破壊してしまったり、長女の泣き声にイライラして暴言を吐いてしまうことがあった。これはまずいと思い、相談にきた」というものだった。

Xは本州外の出身で、原家族は対人援助職の母、2人の姉と双子の姉の4人姉妹末っ子であった。父はアルコールなどの問題がありXが小学校低学年

時に両親は離婚。その後、母親が働いて4人の娘を育てた。長女は双極性障害の既往あり。Xは高校生の頃から過食嘔吐の症状あり。Xの母親は別れた夫に対しては強い嫌悪感を抱き、娘たちにもそれを伝え続けていた。

個人療法は初期、夫との関係の理解を深めていくことが中心であり、夫への怒りは徐々にX自らの内的な問題へとシフトしていった。また、Xは母と姉たちは非常に距離感が近く非常に頻りに連絡を取り合っていることや、母親をよく働きこどもに不自由させなかった自己犠牲的で完璧な母親と考え、それと比較して自分の不出来を辛く思っていることが語られた。が、心理療法家庭が進むにつれ、母親や家族への強い理想化が崩れることになった。その後、Xは自らの離人傾向に苦しんできたことや、長年抱えてきた孤独感について悲しみとともに語るようになっていった。半年ほどの個人面談を経て、その時期に公募していた、本プログラムを知り、参加を希望した。その動機は、「娘の泣き声にイライラするのがまだ治らない。他のお母さんが何を考えているのか知りたい」というものであった。

本プログラムに参加した他2名は以下のY、Zであった。

Y(40代)専門職。夫は海外赴任中の専門職者で小学生女兒と3歳男児の母である。「集団が苦手。ママ友とか大嫌い。だが、集団に価値があるとも感じていて、出てみたいと思った」と参加を決める。

Z(40代)元専門職、現在主婦。結婚を機に対人関係上うまくいっていなかった前職場を辞めたことが失敗体験になっている。5歳男児と1歳女兒の母親。「息子の登園渋りや強い主張への対処に悩んでいる」。

3.2.2.事例プロセスと理解(Xを中心に)

【メンバーたちの共感的承認と自分を許すこと】

#1 Xが単身赴任の夫が帰省について上司に相談しない状況に腹が立ち、電話越しにキレてしまうことについて話し始めた。YとZが、Xの「いつ戻ってくるか、見通しのない辛さ」を想像して言葉にし、メンバーたちはやり取りを始め、時にXの苦労を労った。Xは短い時間話ただけなのに、こんなに受け取ってもらえることに驚いていることと、なぜ夫に伝わらないのか、どうやったら夫に伝わるのか苦しいと語った。そしてこれまで、自分のことを我儘だと思っていたが、そこまで我儘と思わなくてもいいかもしれないと感じられたのは大きな収穫だとも語った。その後、他メンバーの家族における困りごとの話に対してXは、「旦那さんがこどもを怒ってくれるのが羨ましい」「こどもの気持ちにそんなに寄り添えることにびっくり」と語る。Xは次のセッション以降、こどもの泣き声に耐えられず、こどもに優しい気持ちになれなくて、慰められないこ

とへの深刻な困り感について皆に徐々に打ち明けられるようになる。これに対しメンバーは共感したり、一人で二人の子育てをしていることの大変さを思えば、労いたくなるという言葉をかけたり、自分の子育てにおける大変さを語る。

【夫との関係と、それぞれの違いを認めること】

#4では、夫との関係についてメンバーたちが語り合った。Xが、単身赴任中の夫から連絡が来るまで寝ないで起きて待っていることを語るが、これに対しYは、自分は全く別のタイプなのでXの話が分からないと言う。これを受けてメンバーは夫との関係性を巡って、花を咲かすような雰囲気や文句とのろけを語り合う雰囲気になる。また、Zは、義理の母親が夫だけでなく自分に対しても距離が近いため、自分の原家族の距離が遠かったのだと振り返ったことや、自分もお母さんにかわいがってもらうことによって安定した部分があると言う。また、Zは、自分の若い頃を振り返り、自分の恋愛の在り方は、「全然Xよりも、イタくて重かったよ」と笑う。これを聞きXは、自分が変われるかもしれないと希望をもったと言う。

【個人の葛藤の浮上と、母性を巡る嫉妬/競争】

#6の頃、YやZは自身の生活や仕事の中での困難に直面していた。Yは、原家族の密着感への嫌悪感を語り、また、ママ友の愚痴を言い合う様子も嫌いでママ友がいないことを語る。それを聞いて、Xは、原家族はよくしゃべるが、壁のある家庭だったように今は感じているとのこと、例えば、原家族では誰かがイライラしていてもその理由も聞くのが憚られ、理由が分からずにいたと言う。また、夫に自分離別した父親のことは話せるが、母親のことを悪者にしたくないために母親の文句を話せないのだと言い、それはどこか、お母さんにしてほしかったことを旦那さんに押し付けているんじゃないかと自分で感じているからだ振り返る。Zはそれに対し、こどもの頃、母親のことを友達に愚痴ると、友達がお母さん酷いねと言ってきて、それに対して自分が思うのはいいけど他人から言われたくないと思っていたことを言う。それを「同じ気持ちだ」とXは言うが、Yが、Xは今、Zに話を合わせたのではと指摘し、もっとお母さんとの間に未消化な怒りがあるのでは、と尋ねた。

Xはそれに同意し、勇気を出したように、皆さんに聞いてみたいことがある、と話し出す。自分は親に、自分の体調の悪さを訴えても真剣に取り合ってもらえないできたし、今でも病院に行って、たいしたことないと言われるのが怖くて病院に行けない。また、夫に体調が悪いという言葉が拾ってもらえないとイライラする。普通の親や家族は、具合が悪いというこどもや夫がいたら、どうするのかという質問である。これに対してYが、本当に率直に言って

いいのか?と躊躇しながら、Codt.とXの了解も得て、お母さんとの間で心配してもらえなかったことに傷ついていて、幼少期の怒りも上乘せされているのではないかと感じると語る。Xはその発言を受け取り、感謝するが、ZはYの発言を、分析的で文句のつけようのない説明で、自分は言うことが何もないが、喋り方が嫌だと批難する。Yはそれを聞いて、黙ってしまう。Codt.はこのプロセスを振り返るが、Yは、傷ついたことと、自分は自分のありようについて不快だと言われることが度々あり、だから自分は人と関わりたくないのだ、と泣きながら語る。また、Zは謝りつつも、Yが言ったことをCodt.が言うのならいいが、同じ母親同士の人が言うことに耐えられない感じがするのだと答える。非常に深刻な雰囲気のままグループは終わる。

【見せられなかった姿を見せても壊れない場】

#7は沈黙から始まりまった。Codt.から前回のグループについて触れると、XとZは自分は意外と不安なくグループに参加していると語る。またXは、前回のYの、人の意見に合わせる自分という指摘は大事だったと感じていること、自分はYの話にもZの話にも納得することがたくさんあり、流されているようだが、本当に勉強になっているのだと言う。さらに、それぞれの違いを理解し、ノーを言う文化がここにできてきているのではないかと語る。それを聞いてZは、実は前回のグループの後体調を崩したと言い、しかし、普段の人間関係では絶対出てこない自分が出てきて驚いたこと、Yは「話していいのか」と調整しながら話していたことも思い出し、自分の何らかの葛藤が表れたのだと考えていることを語る。やり取りを通じてZは、自分から見るとYがスマートに見えて、自分がダメなところが多くて辛い、羨ましいと言う。こうした言葉を受けて沈黙していたYは、眠れないくらい前回のグループが嫌で、一言もしゃべらないでやろうと思っていた、と言う。Codt.は、よく来てくれた、よく話してくれた、と応じた。Yは、これはいじめではないかと語り、Codt.が、何をいじめと感じたのか教えてほしいとNot knowingスタンスで関わると、Yは「本当に分からない?」と驚くが、やり取りを通じて、「自分が傷つけられるのもそうだけど、自分が言ったことで相手を傷つけるのもすごい怖い。だからもう言いたくない」と語る。Codt.はこの時期、日々プログラムの外でも苦しくなるほど何かを抱えている感覚があったが、一方で、こうして抱えていることの意味も感じていた。このような感覚のまま#8では、親を尊敬できなくなった、恥ずかしく感じるようになった話がメンバー間でなされ、Codt.の、「なかなかみんな完璧な親にはなれないね」の言葉に場が和む場面があった。そしてこの回、Yは最後に、何についてかはっきりしなかったが、丁寧

に、「ありがとうございます」と言った。

#9の冒頭、Yから仕事の中でハラスメントを受ける状況に陥っていることを語り、その大変な話を皆でゆっくり聞くことになった。そんな中でXはYの話をも自分の場合に当てはめることをせずにそのまま聞くということができないことに気づく。

「どうしたらそのまま相手の話を聞けるのか?」とCodt.に尋ねたので、Codt.は、分からないことはそのまま相手に質問してみてもどうか、と返答する。XはYに率直に質問し、やり取りから、XはYと上司の距離の近い関係について言及する。するとYはそれを受け止め、距離を近づけてしまったことの後悔とその苦しみを情緒的に語る。#10の最後の回にXは、夫から連絡がなくても気にならなくなってきたが、同時に夫への距離が遠のくのは良いことなのかという戸惑いがあることを語る。メンバーとのやり取りを通じてXは、自分は寂しさを抱えていたが、寂しいと言っても誰にも届かない気がして怒っていたかもしれないと、涙ぐんだ。また、ここが最後と思って寂しいと言えるのも自分には新鮮で、自分の成長を感じると語る。Yは、後半危機的な状況があったが、Codt.が耐えてくれたのを感じていた、と感謝を語り、Xはそれに対し、私もそう思っていた、先生が褒められると私も嬉しい、と笑った。

3.3 考察

3.3.1 事例理解 【構造の設定の困難に見られる、母親の置かれている状況】 本実験的集団精神療法事態（以下、グループ）は、母親の参加しやすさを考慮してオンライン・グループとし、また生活に合わせて毎回予定を調整し、更に、こどもがプログラムに入ってくることを許可した。そのためプログラムはいつも不安定なものとなった。これはまるでプログラム実施者が完璧な状況を提供できない母親を再演しているかのように思われた。そう考えると、「完璧な母親はいない」という現実を常に突きつけ、そして自分たちで課題を達成しようとする試みとしてグループプログラムが進められていたとも考えられた。つまり、最後まで皆が来続けることができたのは「完璧な母親」への葛藤を持つ我々にとって意味あることが起きたのではないかと感じられる。

【母親の理想化と自己の価値下げ】 Xは個人面接において、母親への理想化が極端に強い特徴を持っていたが、それが緩んだ頃、グループに参加した経緯を持つ。そしてグループの中では、叶えられなかった母親への願望を夫に投影し、怒り続けていることが明らかになり、またそれに続いて、理想化していた母親は、実のところ自分の体のことも気遣ってくれない母親であったことを想起した。そして自分

もまた、こどもに対して心からケアできないことに悩み始めたのである。

Xを巡って、各メンバーはケア的、つまり母性的に関わった。そうした中でメンバー間には、自分が良い母親（あるいは良い妻）であることを巡っての競争と嫉妬、または、理想的な母親と完璧ではない母親の葛藤を抱えたこどもとしての苦痛の力動が顕著となった。#6でのYへのZの嫉妬と攻撃、そして、そこからCodt.が苦痛に耐えてコンテインする感覚、そして#7、8と沈黙と怒りを表現し続けたYが、#8のThの完璧な母親になるのは誰にとっても困難だという言葉聞いた後の、ありがとうございますという表現と、#9での死にたいほどの辛さの吐露は、そういった綾が見えるように思われた。

このような力動には、日本の母親たちを取り巻く母親信仰の内在化力動が見え隠れする。自分もまた自分の母親が完璧な母親幻想だったと思い続けたいと願いつつ、一方で完璧な母を得られなかった怒りを抑圧しているという葛藤が一層強いのではないかと感じるのである。

また、この日本の母親幻想について、横山⁸⁾の日本神話の検討に基づき考察してみたい。彼によれば、西欧のそれに比して日本の集合的意識は、ことさら排他的に「母親元型」の肯定的側面のみにも光を与えてきたと言う(p.97)。多くの世界の神話の中に、「いつまでの可愛い幼児でいて欲しい」という母親の強い無意識的願望である「太母の否定的側面、すなわち飲み込む母親」「自分自身と違ったこどもの新しい意識を育て上げることができず、無意識的にこどもを自分の生のために利用してしまう母親」モチーフが存在する(pp.52-53)。そして、もちろん日本もまたその例外ではないのだが、とりわけ日本の女神の場合、(男性神の未熟性や裏切りによって)自らの「否定的側面」や、時に醜悪である原初的側面が露呈すると、自らの意志で自らを消し去る特徴があると言う。イザナギとイザナミの神話では、黄泉の国に幽閉されたイザナミは生殖性と直接的に結びついた「肯定的な母性」の中でのみ生きることを許されており、イザナミも、また閉じ込めたイザナギも、太母の否定的側面を受容できなかった(pp.60-61)。西欧の神話では、対照的に、母イシュタルに毎年殺されながら蘇生させられるタンムズのように、自分の息子であり愛人でもある男性神を自由気ままに扱う女神たちの姿がたびたび描かれており、否定的な母性の描かれる余地が相当に存在する(p.68)。また、コノハナサクヤ姫に至っては、天からこの世に降りてきた最初の天皇家の祖先であるニギトと一夜の結婚を営み、受胎するが、それが自分のこどもかニギに疑われ、姫は自分の産む子がニギの子であることを証明するために産室に火を放つ(pp.76)のであるが、このように、神話には

姫の圧倒的強さ<意志・自我>が示されている。この際、姫に様々な感情があり、それが火によって象徴されているのだらうけれども、姫は強い情動に圧倒されることなく、3人のこどもによって示される新しい可能性を成功裏に産み出し、そして自らは消失したのである(p.76)。

こういった神話の分析を踏まえ、横山は以下のように考察する(p.93)。

このように、日本の女神たちの<意識>の在り方とノイマンの「母権的意識」とは、ある程度類似性があるが、この母権的意識には属さない<自我・意識>に由来する強い意志の力を、日本の女神たちは保持している。それは、これらの日本の女神たちは、新しい<意識>を担う自分のこどもたちの価値をどこかで理解していたからこそ、この強い意志力でこどもから離れることを選び、飲み込もうとする自らの「否定的側面」を犠牲にしているからである。

つまり、日本の母性に関わる集合的無意識の中に、母とは、自らの太古的な飲み込もうとする欲望を次の世代を産み出すために隠し、そのためには自らを消し去ろうとするのも厭わない強い自我の持ち主であるという、男性性女性性を備えた像があり、それが日本社会における母性信仰の「強く自己犠牲的な母親」像に反映されており、また、西欧の女神と異なり、怒りを完璧に抑圧し、怒る姿を晒すくらいなら自らを焼き殺すといった徹底的に醜さを隠そうとする女性の特徴もまた、日本の良き母親像に影響を与えているように思われる。

そう考えると、#6~7で起きたグループ内で母親的に振舞っていたYZのある種の完璧さ、整った姿が崩れていくことと、それに伴うグループを破壊せんばかりの怒り(加えて、大変な疲労感を伴ったCodt.のコンテイング)、そして「完璧な母親になるのは難しい」という言葉が与える緊張の解ける感覚は、私たちの中にある、日本的完璧な母親を求める自らに向けた縛り、あるいは社会的無意識の徹底操作プロセスの初期段階だったのではないかと分析する。

3.3.2 「叫び」の背景にある多層なファクター

さて、本事例に見られた「叫び」の背景にある多層なファクターを列挙してみたい。まず、研究1同様に、生育歴や外傷の問題といった母親個人の内的な問題があった。そして、結婚に伴い自らの職業アイデンティティが断絶する体験はXもZも強烈に体験していたようだった。特にZにはその体験がYへの強い嫉妬心として表れていた。また、本事例では神話レベルから、自らの母親との間に起きる「完璧な母親」葛藤の力動まで、多層的なレベルで「完璧な母親呪縛」が存在すること

が示されたように思う。研究1でも示したようにこの「完璧な母親呪縛」は、それまでの人生の連続性を感じられる一つまりアイデンティティ感覚を維持した、自分らしさを伴う母になっていくことや、職業人としてのアイデンティティを追求することを放棄するのを余儀なくさせるように思われた。恐らく、この呪縛から自由になり、自分らしさを伴う母としてアイデンティティを束ね直していくには、子育て等に共に取り組む夫や周囲の人間関係が必要であり、社会的価値観の中に、「理想的な母」を押し付けるのではなく、個性豊かな様々な母の在り方が受容されていく風潮が育たない限り困難なのではないかと思われる。

また、Xに関して言うと、コロナ禍において夫が海外への単身赴任を余儀なくされ、2人の幼い子どもを一人で抱えることとなった。偶然Yも夫が海外へ単身赴任しており、その大変さに共感してくれ、Xは一人で子育てしている大変を省みずに、出来ない母親だと自分を責めるのを止めるきっかけを得た。

ブリントン⁹⁾は、日本の少子化の問題を社会学的に分析する中で、企業が結局のところ母親に子育ての負担を強いる仕組みから脱することができていないことを指摘した。その一つに転勤、単身赴任の問題を挙げていたが、こうした大きな社会の仕組みの犠牲になり、怒りを抱え、虐待的になっている母親がここにもいたのである。

4. 総合考察・結論

研究1, 2を通して、母親の孤立の問題は多層的

なファクターの中で、母親になってからのアイデンティティの束ね直しの作業が途絶するために起きているのではないかと考えられた。その要因として、図1にまとめたような多層的なものが想定でき、こうした多様な要因の中で不全感を抱え、また、難しい、うまくいかない子育ての責任を内外から自分に課し、孤立感を深めている姿が浮かび上がった。

今後、自分らしい母親になることの多様性が認められる社会を構築していくことで、母親となってからのアイデンティティ再構築プロセスが阻害されにくい社会になっていくことが望まれる。

また本研究では、「怒り」に焦点を当てて研究を始めたが、研究1を通して、怒りではなく「叫び」とそれを定義しなおすに至った。支援の場において、時に難しいお母さんと呼ばれる人たちは、文句が多い、自分の感情的な訴えばかりする、などと敬遠されることがある。しかし、こうした母親たちの「怒り」の様相は、①自分だけでなく様々な声が混ざり合った圧縮した訴えであり、②本当には理解してもらったり、労いや助けが得られたりすることを求めているのに、③周囲には騒音のように忌み嫌われる、といった、コミュニケーションの失敗の様態なのであって、その背景にあるだろう「叫び」あるいは求めを聞き取ろうとすること（Not knowing スタンスと共感的承認）によって、彼らが本当に求めているものに真摯に向き合うことの手伝いができるかもしれない。これは難しい営みだが、図1に挙げたような文脈を想定することが、その叫びを聞き取ることの助けになるだろう。

本研究は事例の分析を中心として結論したが、現

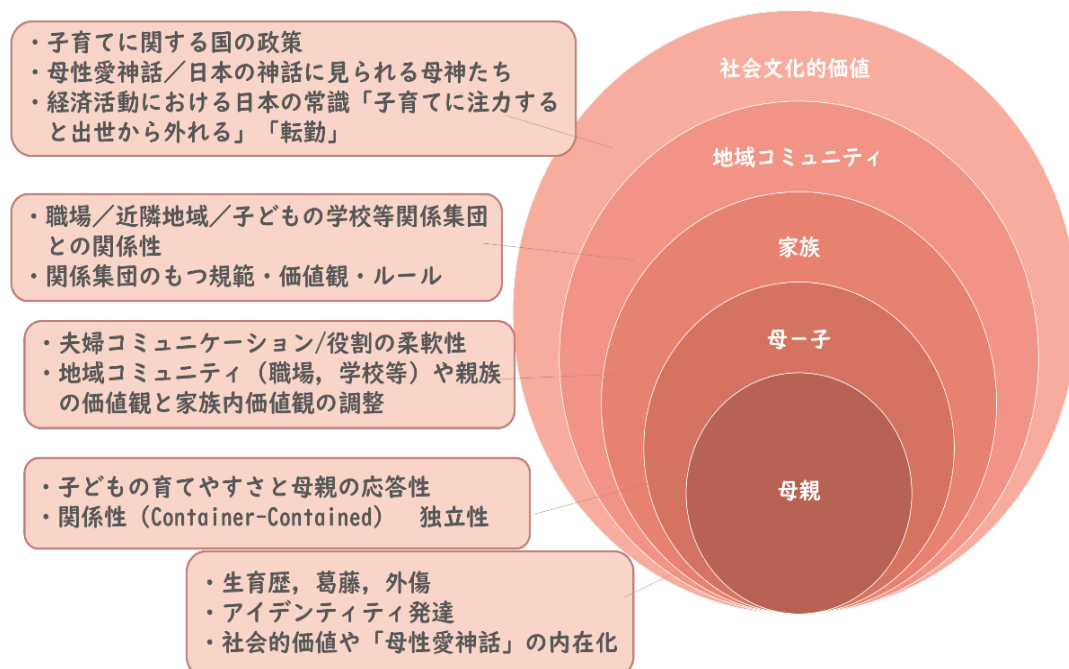


図1：母親アイデンティティ形成を途絶させる「叫び」に圧縮された多層的なファクター

象学的手法を用いるなどして、更に丁寧にデータを読み込み、ナラティブ記述を試みたい。それぞれの母親の「叫び」のナラティブをもっと描くことが、彼らに共感し、彼らのそれぞれの個性を認め合う社会に近づいていく一歩だと信じるからである。

注1) X年は研究1実施年を表す。研究参加者の個人情報保護の観点から、参加年を明らかにしない配慮のための表記である。

謝辞

本研究の遂行にあたり、多大なご支援をいただいた公益財団法人マツダ財団の皆様、特に様々な場面で支えてくださった井上紀文様に厚くお礼申し上げます。コロナ禍と重なり、実験的事例研究の実施が困難になりましたが、十分な研究ができるようにと延長を重ねることを許してくださったことにも心より感謝いたします。また、本研究を実施するにあたり、様々なお手伝いをいただいた国際基督教大学教授西村馨先生にも御礼申し上げます。最後に、今回の研究に協力してくださったプログラム参加者の皆さま、本当にありがとうございました。皆さんの母親人生が喜びに満ちたものになるよう応援しております。

発表論文(学会口頭発表含む)

- ① 揖斐衣海・西村馨・大橋良枝 (2021). 子育てに孤立感を感じる母親たちの短期集中グループ: 孤立感からの脱却のカギとは? 精神分析的心理療法フォーラム第10回大会一般演題。(口頭発表)
- ② Ohashi, Y. (2022). Groups of isolated mothers: Breaking free from motherhood myths and isolation. (Symposium: Culture bound? Groups for Hikikomori, disaster-relief, and isolated mothers in Japan) The 21st Congress of the International Association of Groups Psychotherapy and Group Processes. (Symposiast, Oral presentation).
- ③ 揖斐衣海・西村馨・大橋良枝 (2022). 母親のグループ: 孤立と認知的信頼の途絶からの回復. (西村馨編著 実践・こどもと親へのメンタライジング臨床: 取り組みの第一歩. 第12章) 岩崎学術出版.
- ④ 大橋良枝・揖斐衣海. (2023) 「母親」の孤立を社会文化的価値観の文脈で理解する. 聖学院大学論叢 (印刷中)

参考文献

- 1) 荻本快・大橋良枝(2021). 後期青年期女性の母親イメージの分化: キャンパスアイデンティティグループによる事例研究 集団精神療法, 37(2), 245-254.
- 2) 多賀太(2005). ポスト青年期とジェンダー<特集>後期青年期の現在 教育社会学研究, 76, 59-75.
- 3) Bateman, A. & Fonagy, P. (2016). Mentalization-based treatment for personality disorders: A practical guide. pp.186-188. Oxford.
- 4) 大橋良枝 (2017). 知的特別支援学校の混乱に対する臨床介入モデルの精神分析的検討(1): 愛着障害児の投影性同一化と教員の孤立 聖学院大学論叢, 30(1), 65-81.
- 5) Ohashi, Y. (2021). Discussion on the Meaning of “Reverie of Groups” During School Consultation. Forum, 9, 66-74.
- 6) Bion, W.R. (1962). Learning from experience. Tavistock.
- 7) 大日向雅美 (2016). 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証. 日本評論社.
- 8) 横山博 (1995). 神話のなかの女たち: 日本社会と女性性. 人文書院.

文書院.

9) プリントン, M.C. (2022). 縛られる日本人-人口減少をもたらす「規範」を打ち破れるか. 中公新書.